〈巻　頭　言〉

高齢者の生活と大都会

髙石　昌弘

1964年から翌年までの18カ月間，ロンドン大学小児保健研究所で発育研究に携わっていたことがある．街や公園などで老人が散歩している姿をよくみかけ，当時の日本の状況を考えると，さすが福祉の進んだ国だという印象を受けたものだ．専門家の立場からは多くの見解もあろうが，それはともかく，かなり高齢と思われる老人を街でみかけること自体が新鮮に感じられたわけである．

さらに私事にわたり恐縮だが，４年前，発育学関連の国際会議に出席するため23年ぶりに英国を訪れた時のことを思い出す．四半世紀近い空白があったので懐しい思いが強かったことはいうまでもないが，その折に，当時88歳だった老母を同伴したため，いろいろな意味で新しい体験をした．長距離の歩行が無理なので車椅子を持参したからである．感激したのは，大都市だけでなく地方都市の駅でも必ずエレベーターがあり，一般の施設では，ほとんど，スロープが完備されていたため，車椅子を押す苦労が少なかったことである．さらに，街で車椅子を押していると人びとがよく気付き，よけて通りやすいように道をあけてくれる．それが実にさりげないのである．

折角購入した車椅子でもあり，英国での経験で自信がついたためか，老母は今までのように家に籠もりきりではなく，誘えば街に出ることを好むようになった．しかし，車椅子を電車に乗せて街に出ようとすると，東京の現状ではなかなか大変である．まず，駅にエレベーターやエスカレーターが少ない．スロープも意外に少ないことに気づいた．駅員は気がつけば手伝ってくれるが，やはり，物理的な施設の整備が必要なことを実感する．それに，街の雑踏のなかでは高齢者に対する人びとの配慮も，残念ながら欧米先進国のそれとは違うような気がする．

高齢者をはじめ弱者に対する思いやりの心はどこで教育されるのだろうか．本当の意味で先進国といえるほどに熟成した社会には，ほど遠いことを痛感させられる．むしろ，地方の農山村や海辺の村には，われわれが都会で失ってしまった大切なものが残っているのかもしれない．平成３年度の厚生白書には，「広がりゆく福祉の担い手たち――活発化する民間サービスと社会参加活動――」というサブタイトルが付けられている．今日ほど，保健，医療，福祉の総合化が求められる時代はかつてなかったであろう．何とかして，高齢者も生活をエンジョイできるような素晴しい大都会を創り上げたいと思う．益々都市化が進んでいくなかでの新しい公衆衛生の課題の一つであろう．

今年10月の第51回日本公衆衛生学総会については，東京都衛生局の協力を得て，本院のスタッフが中心となり計画し準備を進めている．筆者は学会長要望課題として２題を提案したが，そのうちの一つは「大都市の公衆衛生」である．一般分科会での討論とは一味違った総合的な意見交換ができるよう念願しているのだが，本号の企画のような高齢者の問題が多くとりあげられることを念じている．

本誌「公衆衛生研究」も装いを新たに再出発して早くも一年経過した．編集委員諸兄姉の努力により好評を得ていることは大変喜ばしい．さらなる大発展を期待して止まない．

（国立公衆衛生院長）